

# 5年生 考えよう！伝えよう！『未来のびわ湖』 ～びわ湖から海への発信～

彦根市立佐和山小学校

## 1 学校名

彦根市立佐和山小学校

## 2 活動名

5年生 考えよう！伝えよう！『未来のびわ湖』～びわ湖から海への発信～

## 3 実践の概要・ねらい



「未来のびわ湖を守ろう！」大きく手を挙げ、宣言する子ども達。上記の写真は、びわ湖放送の取材を受けた際のものである。今のびわ湖の環境問題を見つめ、未来のびわ湖のことを考えられる子どもの育成を目指して取り組んできた。

文部科学省のホームページにESDとは、《これからの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組む (think globally, act locally) ことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動です》とある。この中の下線部分を「びわ湖の環境問題」として捉えた。びわ湖は、1,450万人の生活用水と経済的發展を支える必要な水資源となっている。まさに「Mother Lake」である。私たちに様々な恵みを与えてくれるびわ湖だが、外来魚の影響で固有種の魚が減少したり、生活様式の変化によって水質が悪化したりと持続不可能な状態になっている。この持続不可能な状態のびわ湖に対して「未来のびわ湖を守るために自分達にできることは何か。」を考え、行動する学習展開を計画することとした。

本学年の子ども達は、教師が出した問題には前向きに取り組み、それなりの結果を出すことができるが、それは「やらされている」感が強く、自分達の思いや考えが弱いという課題がある。そこで、本単元の取組を通して、子ども達がびわ湖に関心を抱き、課題追究し、行動化できる力をつけさせたいと考えた。

このような子どもを育成するためには、指導者が子ども達の自発的な行動を引き出す術が必要となる。その術として、びわ湖を守るために頑張っている人々に出会うこと、体験活動を積極的に取り入れること、子どもの思考に揺さぶりをかけ価値観を変えることなどを重点目標として取組を進めていった。

#### 4 実践計画

日時	概要・活動計画	教科等との関連
5月 7日	びわ湖イメージマップ作成	総合
5月中旬	びわ湖島調べ学習	総合
6月15日	沖島校外学習	総合、理科、社会
6月中旬	びわ湖調べ活動報告書作成（フローティングスクール後に完成）	国語、総合
6月22日	びわ湖の食材の学習	学活、家庭、総合
6月27日 ～28日	びわ湖フローティングスクール	総合、理科、学活、家庭
夏休み	環境トライカードの実施	国語、理科、総合、家庭
9月上旬	環境トライカード交流	
9月28日	琵琶湖博物館校外学習	総合、理科
10月～ 11月	びわ湖の極め人になろう 調べ学習→交流	国語、総合
11月27日	福井県立内外海小学校とスカイプ交流	総合
11月27日	びわ湖について葛藤場面学習	総合
12月26日	近畿ESDコンソーシアム成果発表会参加	総合
冬休み	ちょっと3か条の取組	国語、総合
1月10日	ECO壁新聞コンクール出品	国語、総合
1月25日	学習成果を保護者に発信	国語、総合
1月29日	福井県内外海小学校5年生と本校で交流	総合、理科
2月 4日	佐和山祭りで全校に学習成果を発信	国語、総合
2月中旬	佐和山エコ集作成	
3月 6日 ～13日	佐和山エコ週間～ちょっと3か条～の実施	国語、総合
3月20日	佐和山エコ集配布（彦根駅）	総合
3月下旬	佐和山エコ集送付（沖島、内外海小など）	総合

未来のびわ湖のために自分達ができることを目指して取り組んできたことについて「つながり」をキーワードとして述べることにする。

## 5 今年度の実践

### ①計画からの追加・変更点

追加・変更点は、海洋教育ストーリーマップ②で太字で示している。

#### (1) 人とのつながり～出会いが考えを変化させる～

指導者が子ども達の自発的な行動を引き出す術の1つに「びわ湖を守るために頑張っている人々に出会うこと」を挙げた。子ども達の考えが大きく変わった2つの出会いについて述べる。

##### ①スタートは沖島の漁師さん

「今のびわ湖は持続不可能です。」この言葉は、沖島漁業共同組合の代表理事組合長さん（以下、組合長さんとする）の言葉である。この組合長さんとの出会いは、これ以降の子ども達がびわ湖の環境を考える際に大きな影響を与えるものとなった。

びわ湖の問題を知るのは、子ども達にびわ湖を身近で感じる事が一番と考え、日本で唯一、淡水湖に浮かぶ有人島である沖島からスタートすることにした。私たちは、沖島をびわ湖の中心に位置する場所とし、沖島に住んでおられる人々をびわ湖と共に生きている人と捉えた。

沖島では、探検ウォークラリーをしたあと、沖島小学校の校長先生と組合長さんから話を聞いた。特に組合長さんの話が興味深かった。組合長さんが小学生のときは遊び場がびわ湖であったことや、水の中に足を入れると魚がつついてきたことなど、びわ湖が生活の一部だったことを話して下さった。しかし、合成洗剤による富栄養化でびわ湖内の環境が著しく変化し、漁獲量が減少したことも聞いた。そのために、びわ湖は持続不可能な状態であること、危機的な状態であることを知った。それ以降、石けん運動などのびわ湖の環境改善で水は少しずつきれいになってきたと聞き、子ども達は驚いていた。子ども達の感覚ではまだまだびわ湖は汚いと感じていたからである。



【 沖島の漁師さんのお話 】

このような組合長さんの話から、「私の考えるきれいな水と魚にとってのきれいな水は違うんじゃないかと思った」「びわ湖の汚い原因はごみだと思っていたけど違うとわかった」と感想をもつ子がいた。組合長さんとの出会いによって、びわ湖の環境の変化が島に住む人々に大きく影響を与えていることを実感したと考えられる。子どもにとってのびわ湖は、滋賀県で有名なものぐらいだったものが、守らなくてはならないもの、なんとかしなくてはならないものに、びわ湖に対する考え方が変化したようだった。

##### ②海と湖をつなぐ仲間の輪

日本海に面する福井県小浜市立内外海うちとみ小学校の5年生との交流である。この交流は、11月27日（火）にSkypeを通じて一時間ほど行った。琵琶湖は多くの川から水が流れこみ、そして瀬田川から海へと繋がっている繋がりの一部である。しかし、子ども達は琵琶湖については極め

てきたが、琵琶湖の前後の繋がりまで気付いている子どもは少ない。そこで、海を守ろうとしている小学校と繋がることで、今までびわ湖だけの視点で学習してきた子ども達の視野が海へと広がるきっかけになると考えた。子ども達は、内外海小学校は日本海が目に見える学校ということから、海についての発表のみだと考えていたが、発表は山を守ろうとしているという内容であったため、「なぜ、海ではなく、山についてなんだろう?」と多くの子どもが疑問をもった。Skype 後、その疑問について考えていく中で、びわ湖も何かと繋がっているのかもしれないということに気づき、繋がりについて調べ始めた。また、互いの発表を通して、海とびわ湖には共通した課題（漁師の数が減っている、ごみ問題等）があること、そしてよさ（どちらも生活に関わっている、守ろうとしている人がいる等）にも気付いた。そして、これまで「海とびわ湖を守ろう。」という同じ思いをもった遠く離れた内外海小の子ども達と繋がることで、新しい知識を得たり、新しい見方ができたりすることに気付くことができた。



【 skype 交流の様子】

## （2）家庭とのつながり～ゆさぶりをかけた葛藤場面～

びわ湖の水質悪化の原因の一つが、生活排水であることを知った子ども達に「びわ湖のためにラーメンの汁を飲むかどうか」尋ねた。このような自分とびわ湖、生活とびわ湖に関する究極の問題を10問出した。このことによって子ども達の考えはゆさぶられ、葛藤が生まれる。びわ湖を多方面から見ることでびわ湖と自分達は繋がっているということを改めて認識させることを目的とした。

先ほどのラーメンの問題で、汁を飲むと答えたのは、27人中7人であった。飲む理由は、「美味しいから」や「びわ湖を汚してしまうから」ということであった。中には、ラーメンの汁を作ってくれた人の思いがつかまっているから飲むという子どももいて、人の思いに触れながら答えていた。飲まない理由としては、「ちょっとぐらいいは流しても大丈夫」「体に悪い」「びわ湖のことを守る前に体を壊してしまう」という理由であった。

子ども達は、4年生の社会科「住みよいくらしをつくる」の学習の中で下水処理場のはたらきについて学習しているので家庭排水が直接びわ湖へ流れ出すことはないことを知っている。しかし、下水処理場の見学の際に施設の方が「たくさん汚れた水を流すのはやめてください」と言っていたことを思い出し、ちょっとぐらいいは流しても大丈夫と発言した友達に「そのちょっとぐらいいはダメなんだよ」と意見を返すことができた。1杯のラーメンでびわ湖の水質が極端に悪化するわけではない。しかし、「自分ぐらいいいだろう」「ちょっとぐらいい大丈夫」という気持ちの積み重なりがひいてはびわ湖の水質悪化、環境問題に繋がっていることに葛藤場面を

### 2. 家庭とのつながり

びわ湖の水をきれいにするために、ラーメンの汁は、流さずすべて飲む。

○か×か？  
さあ、どっち？



【 葛藤場面での問題 】



通して気付くことができたと考える。

### （3）川とのつながり～おいしいのは、大阪の水？京都の水？滋賀の水？～

びわ湖には、大小460本の川が流れ込んでいる。この川は、自分達の住んでいる地域と琵琶湖を結んでいる。フローティングスクールでの「水の汚れ回復実験」でたくさんの川がびわ湖に流れ込んでいることを知った。夏休みに実施した環境トライカード（行動化を促す取組）では、川のごみ拾いをする子がいた。



【びわ湖は川と繋がっている】

琵琶湖博物館の校外学習では、展示室の衛星写真からびわ湖から流れ出た瀬田川が海へと繋がっていることを知った。びわ湖の水を1,450万人が生活用水として活用している。全員が同じびわ湖の水を飲んでいるが、同じ味の水を飲んでいるのだろうかという疑問を抱いたA児は、大阪、京都と滋賀の水を比べることにした。比べるポイントは、色、におい、味である。比べてみると、色は、全て透明で同じであったが、においは、滋賀と比べて大阪、京都は薬品のにおいがし、味も大阪、京都のほうが苦味があった。においも味も京都より大阪のほうがきつくなっているように感じられた。A児は、京都、大阪の人はびわ湖の水を浄化したものを飲んでおり、浄化の回数が増えるほどにおいがきつくなり、味に苦みが加わるのではないかと考えた。



【大阪、京都、滋賀の水比べ】

びわ湖と海が繋がっていることから、びわ湖を守ることは海を守ることに繋がっていること気付いた。しかし、京阪地区に住んでいる人々のことまでは気付いていなかったため、今回のA児の水比較によって、びわ湖を守ることは、海を守るだけでなく、京都、大阪に住んでいる人を守ることに繋がっていると意識を向けることができた。

### （4）子どもの学びをつなぐ体験活動～見通しをもたせて取り組ませる～

「指導者が子ども達の自発的な行動を引き出す術が必要となる。」として体験活動を積極的に取り入れることと書いた。私たちは、子どもの学びが繋がるように意識して取り組んだ。

#### ①沖島と繋がるフローティングスクール

「組合長さんは、びわ湖の水はきれいになってきたと言っていたが本当かどうか調べるために透明度調べに行く。」このように子ども達は、フローティングスクール（以下、F.Sとする）の琵琶湖環境学習に目的をもって取り組んだ。F.Sの事前指導として、沖島での探検活動や組合長さんの話から疑問を抱いたことをF.Sで解決しようと投げかけた。F.Sでの琵琶湖環境学習は、①プランクトン



【透明度調べ】

採取と観察②透明度調べ（40年前と現在のびわ湖の水の比較）③水の汚れ回復実験

④魚、湖泥、水草の観察⑤びわ湖の衛星写真シートの観察を行った。事前に沖島で抱いた疑問をどこのブースに行けば解決できるのかを見通しをもたせることで、環境学習の目的意識を高めた。F・Sでは、目的意識をもって活動でき、帰校後は報告書としてまとめることができた。

## ②夏休みの環境トライカードと繋がる琵琶湖博物館

夏休みに実施した環境トライカード（行動化を促す取組）から、琵琶湖の課題を一人一人がもった。その課題追究を「びわ湖の極め人になろう」と称した。びわ湖の極め人になるために、琵琶湖博物館で課題追究の時間をとった。

琵琶湖博物館に行く前に館内マップをもとに子ども達は、自分の課題はどこ展示室に行けば解決できるのか計画を立てた。これは、F・Sの事前指導と類似している。例えば、魚のことを調べたいからC展示室と水族展示室に行くといった見通しをもたせるようにした。この見通しをもたせることで課題がより明確になり、効率よく追究できるのではないかと考えた。この琵琶湖博物館では、教師がびわ湖の気付いてほしいこと、知識として覚えてほしいことをミッションとして出題した。

当日は、自分の課題を追究するために、子ども達は目的をもって学習を進めた。魚を追究するために調べ学習を進めた子が、びわ湖は魚だけ鳥のすみかでもあることに気付いたり、水の汚れについて調べていた子が、赤潮について関心をもったりすることができた。帰校後は、「びわ湖の極め人」になるために調べ学習を進めた。

## （5） びわ湖を守ることは海を守ること～家庭と川は海につながっている～

家庭から川、びわ湖へと続き、海へと繋がっていることを子ども達は学んだ。1月29日に福井県小浜市立内外海小学校の5年生が来校する際に、日本海とびわ湖の繋がりについて調べることにした。子ども達が考えた繋がりには2つである。

### ① 日本海とびわ湖は雲で繋がっている

子ども達は、右の図のように雲での繋がりを考えた。まず海の水が蒸発して雲になり、風でその雲がびわ湖に来て雨や雪となりびわ湖の水となると考えた。びわ湖の水は、瀬田川から京阪地区を經由して太平洋へと流れ出る。太平洋は日本海とも繋がっているため、びわ湖から流れ出た水は、いずれかは再び戻ってくると想像したのである。汚れたびわ湖の水は再び自分達に戻ってくると考えたので、びわ湖



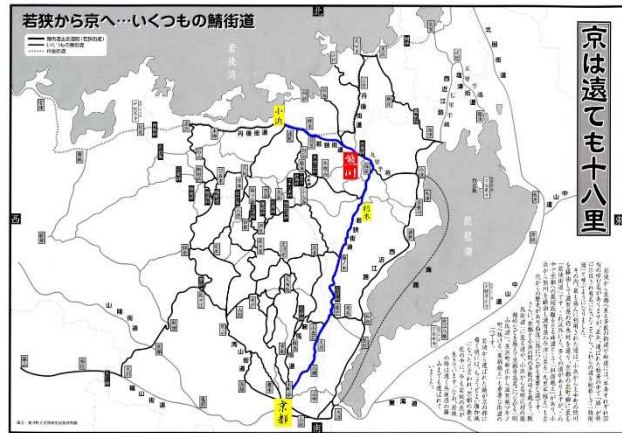
【日本海とびわ湖は雲で繋がってる】

の水をきれいにしよう、大切に使おうと改めて思うことができた。また、自分達が、直接海に行きごみを拾うことはできないので、身近にあるびわ湖を守ろうという意識が強くなった。

太平洋は外国とも繋がっている。びわ湖を守ることは、海を守ることにつながり、さらには世界に通じることになると考え、子ども達にあらゆるものが繋がっていることを意識させた。

## ② 日本海とびわ湖は道で繋がっている

びわ湖の環境学習を進める中で歴史にも目を向けること子どもがいた。日本海産物の海産物を太平洋側の地域に運ぶルートがあることを知った。そのルートは、いくつかあり、「鯖街道」と呼ばれている。鯖街道の1つにびわ湖を経由しているものがあつた。船を使って輸送しているもので、道を使うより新鮮なうちに早く海産物を運ぶことができるという利点があつた。さらに滋賀県の人日本海産物を手に入れられることも利点の一つだつた。



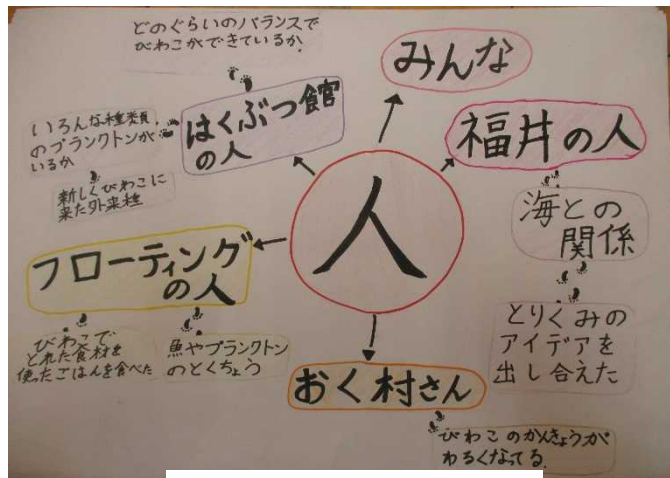
【日本海とびわ湖は道で繋がってる】

ただ、近年は、高速道路の発達により、船より早く輸送できる手段ができたためにびわ湖を経由する必要がなくなつた。昔の人にとって、びわ湖を経由することは物流だけでなく、人が行き来することで街の発展や人との繋がりを強くするものとなつたと考えられる。

### 実践の成果

#### ○子どもの考えを変えた人との出会い

子ども達の考えが深まり、びわ湖に対する見方、考え方が変わっていったのは、びわ湖のために頑張っている人々との出会いを重視したからである。出会いだけではなく、外来魚ボックスを設置した人、びわ湖の水を飲んでる京阪地区の人など直接出会ってなくてもその人の思いを推し量りながら学習を進めることができた。



【B児の描いた関係図】

このびわ湖環境学習でたくさんの人に出会つたことで「自分の考えが変わつた」と振り返りを書いたB児は右のよ

うな関係図を描いた。さらにE児は「びわ湖にはつながりがある。びわ湖を守っている人がいるから、私も一緒にやっていきたい」と書いていた。子ども達が未来のびわ湖のために何ができるのかを考え行動するには人とのつながりが大きいと考えられる。

#### ○子どもの価値観を変えた葛藤場面

葛藤場面ですら最後に次のような問題を子ども達に出した。交流の最後にC児は「滋賀県に住んで、びわ湖のためにできることをやって、きれいになって『ヤッター〜!』と思いたいから」と発言した。

C児は、ワークシートには「そこまでしてびわ湖は守らん」と書いていたが、友達の考えを聞



いているうちに、考えが変わったようである。

授業後に、D児は、E児と「びわ湖を守っていくのは僕達だよ。僕達がやらなきゃ誰がやるんだ。」と話していた。未来へのびわ湖を守っていく宣言ともとれる熱い思いがあふれていた。そこには、今のびわ湖を「受け継ぐ」という使命感を感じる事ができた。人は生活する中でびわ湖を多かれ少なか

れ汚していることは事実である。しかし、びわ湖は私たちの生活にはなくてはならないものである。今後もびわ湖と共に生きるという意味について考え、びわ湖と自分と自分の生活の「いい塩梅」を見つけることが必要であると感じた。

びわ湖の水を汚してしまうので  
びわ湖の周りには人は住まない  
ほうがよい

○か×か？  
さあ、どっち？？



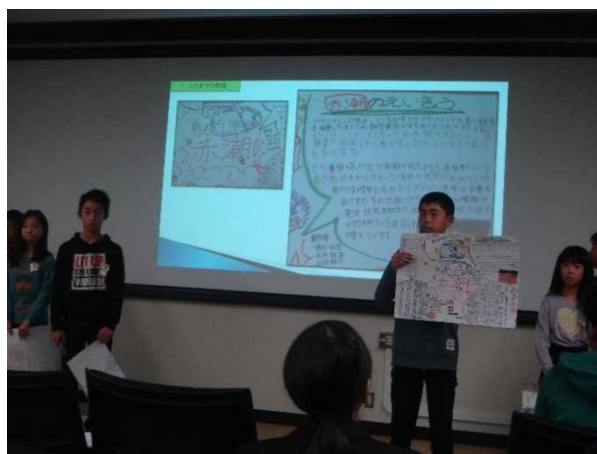
【葛藤場面の最後の問題】

### ○自信をもって伝えられる姿に成長

今までの学習の成果を発信する場を2つ設定した。1つ目は「ECO壁新聞」に一人一人がまとめた。海や湖を守るために自分達に何ができるのかを考えて新聞を作った。(別添資料2)

2つ目は、12月26日(水)、奈良教育大学で行われた「近畿ESD コンソーシアム平成30年度成果発表会・子どもフォーラム」で発表する機会を得た。

子ども達の発表を参観いただいた宮城教育大学附属小学校の先生から「佐和山小の子どもたちの発表を拝聴させていただき、心から感動しました。あのような子どもたちの姿を、自分たちの学校でも実現できるように励んでいきたいと思えます」と感想をもらった。



【自信をもって自分の言葉で伝える姿】

今一度、海洋教育のストーリーマップ①を見直してみると正直、計画通りに進められず、変更してばかりである。実際に、行った活動は海洋教育ストーリーマップ②の通りである。子ども達のびわ湖に対する見方、考え方が変わっていったため、子どもの課題追究に変更を加えていったのである。

### ○びわ湖のことを考え、行動する姿

夏休みに行動化を促す取組として「環境トライカード」を実施した。子ども達が、びわ湖のためにできることを考え、取り組んだ。右の写真は、食器を洗う前に汚れを拭き取ってから洗う取組である。これは、びわ湖の水が汚れている原因の1つに生活排水だと気付いて少しでも汚れた水を流さないようにしている。その他の取組とし



【汚れを取ってから食器を洗う】



では、しじみのみそ汁やコアユの天ぷらなどびわ湖の食材を使ったクッキング、竹生島探検、プランクトン調べなどであった。

冬休みには、再度、行動化を促す取組として「びわ湖のためにちょっとできること3か条」に取り組んだ。夏休みの取組との違いは、家族を巻き込んで取り組むということである。

右の写真は、米のとぎ汁を植物にあげているところである。これは、自分だけでなく母親と共に行った。



自分達の発信からよりよいびわ湖の環境をつくる一歩が動き出す取組として、「佐和山エコ週間～ちょっと3か条～」と

【米のとぎ汁で水やり】

して全校と呼びかけた。「佐和山エコ集」を作って、全校だけでなく地域に発信してびわ湖のために取り組んだ。

## (2) 課題

### ○人材バンクの発掘

びわ湖のために頑張っている人々とのつながりを重要視していたので、どの人に会えばよいのかが手探りでであった。人探しに時間がとられてしまい、余裕をもって活動計画が立てられなかった。人材バンクの発掘の必要性を感じた。

### ○学校教育目標「Think Globally Act Locally」の実現に向けて

本校では、5年生がびわ湖環境学習に取り組んでいる。子ども達のびわ湖での体験活動や調べ学習を行い、様々な視点からびわ湖を考えさせたいと考え、一年間のスパンでは難しいのかもしれない。びわ湖環境学習の内容を精選するか、もう少し長いスパンで捉え、学年ごとの学びの積み重ねでびわ湖環境学習を積み重ねるなど対策が必要である。

## 6 終わりに～びわ湖のことを考え、行動できる大人になりたい～

「びわ湖のことを考えられる大人になりたい」とF児は言った。ラーメンの汁を流すときに、ふと立ち止まって考えられる大人、びわ湖と「いい塩梅」な関係を保つために行動する大人…そんな大人に成長できるように、考えて、行動できる子どもの育成に今後も努めたい。

そのためには、さらに子どもの課題追究を深めた探究的なびわ湖環境学習を仕組んでいく必要があると考える。

未来のびわ湖を守るために自分にできることを考え、行動できる佐和山っ子を育成するために

本実践をたたき台として「びわ湖のことを考え、行動できる大人になりたい。」こんな価値観をもった子ども達を育成することが、佐和山ESDの目指すことであると、本実践を通して強く思っている。



【びわ湖岸清掃

～夏休みの環境トライカードより～】

【資料1】

5年生 考えよう！伝えよう！『未来のびわ湖』～びわ湖から海への発信～

彦根市立佐和山小学校

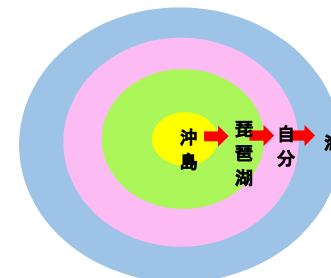
2018年4月

【実践のねらい】

海に隣接していない内陸の滋賀県にとっては、琵琶湖はまさに「母なるうみ(湖)」といえる。琵琶湖の生態系を学ぶ環境教育や豊かな水質源を生かした産業や食文化、琵琶湖と共に生きてきた伝統文化を学習することが、海洋教育の礎となる。『びわ湖から海への発信』をテーマに、地域素材を活用しながら体験的学習を基盤として、子どもたちの意識や視野を徐々に海洋へと広げつなげていく。

○関連 総合的な学習、理科、社会

- 目的 (1)琵琶湖を知る活動を行うことで、「琵琶湖と自分たちとのつながり」を感じるとともに、琵琶湖の魅力と課題を見つけることができる。  
 (2)湖の魚、植物、水質など、自分の課題を解決するために、博物館に行ったり、水質について研究している人の話をきいたりすることで、琵琶湖の環境について、より深く考えることができる。  
 (3)「未来のびわ湖」を見据え、琵琶湖のよさを守り受け継ぐために自分たちにできることを考え、行動することができる。



	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月				
体験的な学習	<b>1. 琵琶湖について親しみ、魅力と課題を見つける 琵琶湖と共に生きる</b> ①琵琶湖イメージマップ ○知っている琵琶湖を振り返る。 ・知らないことがたくさんあるな。・水が汚っていったけど、本当かな。				<b>2. 課題を探求する 琵琶湖から海へ</b> ①びわこの歴史・役割について学ぶ ②野鳥センターやびわ湖ヨシの会などゲストティーチャーの話を聞く。 ○1学期の学習を思い出しながら、課題を明確にしたり、新しい課題をもったりする。				<b>3. 琵琶湖を守る 未来の琵琶湖</b> ①プロジェクトを立ち上げよう ・これからも琵琶湖と共に生きていくために、自分たちにできることはないかな。 ・自分たちだけでいいのかな？ ・滋賀県の全体に伝えたいな。 ・海辺の人とも協力して取り組みたいな。							
探求的な学習	②琵琶湖に浮かぶ島について調べよう ○琵琶湖の中から琵琶湖を見つめるきっかけをつくる。 ・4つの島があるんだな ・沖島にだけ人が住んでいるんだ ・沖島の人ってどんな生活をしているんだろう		④食文化について学ぶ フローティングで出てくる、琵琶湖ととれる食材について知る。		③びわこ博物館 ○それぞれの課題を解決するために、必要なブースに行き、課題解決を進める。 ・ヨシを守ることで、生活を守っているんだね。 ・外来魚ってすごい歯だな。外来魚から、魚を守るために、工夫しているんだね。漁師さんの生活は琵琶湖とつながっているんだね。		④琵琶湖イメージマップ ○今までの学習での学びが視覚的にわかるようにする。 ・最初のころより、琵琶湖について知っていることが増えたな。		⑤社会 食糧生産 ○海を守る漁師さんが木を植えていることから、海への繋がりの視点をもつ。 ・海だけじゃないんだ。 ・じゃあ琵琶湖はどうなんだろう。		②校内への発信 ○学校行事を通して、自分たちの学びを全校に発信する。		③地域への発信 ○発信する方法を考え、実行する。		④海への発信 ○学習成果を発信することで、湖と海の繋がりをより深く感じる。	
表現活動	③沖島探検 産業・伝統文化 ○琵琶湖と共に生きている人の暮らしや熱い思いにふれる。 ○沖島の人とのつながりを感じる。 ・沖島と琵琶湖ってすごく繋がっているんだな。 ・琵琶湖と共に生きるってどういことだろう。				⑤フローティングスクール ○琵琶湖の魅力や課題を実感をもって見つける。 ○沖島へ関心をもち島展望に臨む。 ・どんな魚や鳥がいるのかな。 ・なんでこんなに水が汚いんだろう。 ・湖底はどうなっているんだろう。 ・沖島で魚が減って困っているって聞いていたけどこれが原因かな？				⑥琵琶湖の課題 ○フローティングスクールの2日間を振り返り、琵琶湖の魅力とともに、琵琶湖の課題や、これから探求していきたい課題についてまとめる。				⑥海と共に生きる 琵琶湖と共に生きる ○海辺の小学校と繋がり、海と共に生きるということと琵琶湖と共に生きるということを比較することで、共通点や相違点を知ることによって、「共に生きる」ということを見つめなおす。 ・海のよさ、琵琶湖のよさ、それぞれの良さがあるんだね。			